死にゆく者が生者を束ねゆく
―アクターネットワークセオリーで辿る義父の死―

竹端　寛
社会環境部門

The dying is binding the living: Follow the actors of the death of the father-in-law

Hiroshi TAKEBATA

School of Human Science and Environment,
University of Hyogo
1-1-12 Shinzaike-honcho, Himeji, 670-0092 Japan
bata@shse.u-hyogo.ac.jp

Abstract: In this study, I describe the process of my father-in-law's death through the lens of Actor Network Theory (ANT). During the waning of his power as a living person, the hard facts (matter of fact) were transformed into controversial ones (matter of concern), and his estranged family members, including two children, my wife and brother-in-law, were reintegrated to participate in the “matter of concern”. This process continued even after his critical illness, death, funeral and thereafter. Through this paper, I have examined what it means to describe a certain event from the perspective of ANT.

Keywords: Actor-network-theory, matter of fact, matter of concern

１．はじめに

「悟性とは精神の物質へ向かう注意力なら、この注意力を補う様に、精神が精神に向かう直観と呼ばれる注意力が、これに連結している」（小林秀雄『感想』）

「フィールドワークとは境界領域的なコミュニケーション様式を間主観的に構築する一つの過程である」（ポール・ラビノー『異文化の理解』）

今回の「論考」の元になる草稿を一気に書き上げた後、筆者は「これを論文と呼んで良いのか？」とモヤモヤしていた。そこには、研究者の訓練を受け始めて 20 年以上経つ筆者の中にある、「研究論文とはこのようなもの」という「不文律」や「価値前提」に一見すると「矛盾」するような内容を書き上げたからである。そして、それは筆者だけでなく、おそらく紀要論文に目を通される「読み手」のあなたが考える、「学術論文」の「常識」にも抵触するのではないか、と。それは一体どういうことだろうか？

論文作法の本にしばしば書かれているのは、ロジックをしっかり積み上げる事の重要性である。原因と結果、の因果関係をはっきりさせ、その因果関係から推論出来ることを結果や考察の中で提示していく。各種統計データやアンケート、インタビュー調査などを駆使して、先行研究や理論と対話しながら、因果の連鎖を積み上げていくことで、論証の「確からしさ」を構築していく。これが「科学的論文」の標準化されたスタイルである。筆者自身も、そのような「作法」を学んで来たし、その作法に則った論文こそ標準的なスタイルである、と内面化している。

これを「ある人が死ぬプロセス」に当てはめてみると、どうなるだろうか。生物学的な死であれば、各種の身体データの推移やカルテ記録などのエビデンスを用いて「死のプロセス」を語ることは可能だろう。あるいは、「死にゆく人」やその家族にインタビュー調査を繰り返しながら、本人の内面的実感を「語り」のデータとして取り上げ、「『語

り』に語らせる」ことによって、因果関係の連鎖をくみ上げていく書き方もある。哲学者や宗教学者の先行研究レビューをしながら、死のプロセスについて「既に言われていること」を辿りつつ、「まだ言われていないこと」を浮かび上がらせる事も出来るだろう。いずれにせよ、「客観性」が重視され、書き手の「主観」を排して、いかにデータに語らせるか、が、その論文の「説得力」として機能する。これが、「科学論文」の基本であるし、筆者自身もそのように「信じて」、論文を書き続けてきた。だが、この論考はそのような一般的な「科学論文」の「信念体系」から「逸脱」する内容が書かれている。

2021 年 3 月 1 日、筆者の義父が亡くなった。葬儀と火葬を済ませて帰宅後、そのことをメモ書きで記録しようと筆者はPC に向かい始めた。義父のこれまでのことは、生活支援の判断を一手に引き受けてきた義父の娘＝筆者の妻から聞いていた内容だが、「客観的な語り」としてインタビューに記録したものではなく、あくまでも夫婦による共同記憶の側面が大きい。義父の死のプロセスにおいても、妻と筆者の間で何度も話し合っていたが、それは「インタビューデータ」として記録に取られたものでもなければ、「フィールドノート」としてメモ書きされたものでもない。筆者はそのプロセスに、観察者ではなく、ある種の当事者として関わったし、その内容は「家族」として身体化されていた。ゆえに、調査や研究を目的とした関与である「アクションリサーチ」とも異なり、ただ、関わったのである。

そして、義父の死のプロセスの途上や亡くなった前後のことを備忘録的にメモ書きしたものをつなぎ合わせているうちに、その文章は妻と筆者の、主観と客観の、生者と死者の、人間と非人間の、様々な分け隔てを超えるような文章になりはじめた。それは、これまでの筆者が身体化してきた「論文作法」や「科学的論文」の概念から「逸脱」していたのかもしれないが、書いていて、どんどん先が書きたくなる内容であった。エッセイでも小説でもドキュメンタリーでもない。強いて言うなら、筆者が学びつつある「アクターネットワークセオリー」という視点に基づいた、学術論文であると認識している。だからこそ、大学紀要というメディアにこの「論文」を掲載しようとしている。

冒頭に引用した小林秀雄の表現を用いるなら、論理的思考という「悟性」の注意力だけで本稿を書こうとしたのではない。「精神が精神に向かう直観と呼ばれる注意力」も補完的に本論考の中には入れ込んでいる [1]。またポール・ラビノーの視点に基づくならば、死のプロセスという「境界領域」に放り込まれた義父の家族達が、どのような「間主観的」な「コミュニケーション様式」を生成していったのか、さらに言えば死んだ義父という「モノ」も含めた様々な主観やモノがどのようにハイブリッドに連関していくのか･･･を描こうとしている、ある種意図せざる「フィールドワーク」の記録でもある。

以下では、本稿で用いるアクターネットワークセオリーという「理論」の視点を提示し、その後、本稿で用いる予定の「異界」の「論理」を紹介した後に、義父の死を巡る連関的な記述を深めていきたい。

2. アクターネットワークセオリーという視点

アクターネットワークセオリー（Actor Network Theory: ANT）の主導者の一人、ブリュノ・ラトゥールの主著（2005＝2019）の訳者でもある伊藤(2021)は、以下のようなわかりやすい説明を使ってANT の世界観を記述する。

> 「勇者がドラゴンを倒すという具体的なストーリーで考えてみよう。アクターとは、物語のなかで名前を持って登場し何事かをなすものであり、たとえば、王や王女、勇者、ドラゴン、自由、剣、妖精などである。そして、アクタンとは、アクターが体現している物語文法の単位（主体や客体）である。
>
> では、アクタンは他のアクタンとの関係によって決定されるとはどういうことだろうか。たとえば、『主体』である勇者は、『客体』（王女）などの他のアクタンがいなければ、『主体』として成立しない。物語は、『送り手』（王様）と『受け手』（勇者）による約束（『ドラゴンを倒し、王女を救い出せば、王女と結婚させる』）の締結によって動き出し、勇者が王女を救い出し、約束の履行で終わる。勇者がいるだけでは物語は成立しない。いや、そもそも、勇者とも呼ばれないであろう。
>
> そして、アクタンは、必ずしも人間の登場人物によって体現されるわけではない（ドラゴンを倒す『主体』は、勇者なのかもしれないし、伝説の剣なのかもしれないし、王国なのかもしれない）。モノや抽象的な概念は、『行為を成し遂げるもの』として識別できる限り、人間と同じように行為することができる。」(伊藤 2021:12)

ANT は、線形的因果論科学とも、社会構築主義（社会的なものの社会学）とも異なる視点を提供してくれる。線形的因果論で先のストーリーを説明するならば、王が勇者に命令し、勇者がドラゴンを倒し、王は勇者の約束を守り王女を勇者と結婚させる、という形での、原因と結果の因果の連鎖を形作っていく。社会構築主義においては、勇者は王様に送り出される（送り手―受け手関係の締結を結ぶ）ことにより、王女を救う勇者というストーリーの中に埋め

込まれる（社会的に構成された勇者）という切り取りがなされる。

だが、ANTにおいては、「アクターが体現している物語文法の単位」としての「アクタン」は、人間だけでない。「モノや抽象的な概念」である伝説の剣や王国の存在も、王や勇者、王女と同じように、アクタンとして捉えられる。伝説の剣（モノ）と勇者がアクターとして連関（ネットワーク）しない限り、ドラゴンは倒すことは出来なかったし、そもそも自分の娘をさらわれた父が他者に捜索を命じ、奪還の暁には娘と結婚させることまで約束できるのは、父が「王国」の支配者である、という「抽象的な概念」が機能（連関）しているからである。

ラトゥールは以下のように書いている。

「社会的なものの社会学が信じているのは、一種の社会的なまとまりが存在し、多くの中間項があり、媒介子はほとんど存在しないということである。他方のANTの場合、他に勝る社会的なまとまりはなく、無数の媒介子が存在しており、そして媒介子が忠実な中間項に変わるならば、それはいつものことではなく、めったにない例外的なことであり、何らかの特別な手間をかけて説明される必要があることである」（ラトゥール 2005＝2019:78-79）

王国の物語、という「社会的なまとまり」を定式化してしまえば、そこでの王様による命令も含めて、「王国の物語」なんだから、と了解可能になってしまう。だが、王国や伝説の剣、王様や王女、勇者、ドラゴンなど「他に勝る社会的なまとまりはなく、無数の媒介子が存在」していると捉えると、ストーリーの解像度がぐっと深まってくる。

3. 人間と非人間[2]の連関

ラトゥールは、先の引用で述べた中間項と媒介子の違いを次のように述べている。

「中間項は、私の用語法では、意味や力をそのまま移送する〔別のところに運ぶ〕ものである。つまりインプットが決まりさえすれば、そのアウトプットが決まる。」「媒介子は、自ら運ぶとされる意味や要素を変換し、翻訳し、ねじり、手直しする。」「正常に行動するコンピューターは複合的な中間項の格好の例と見なせる一方で、日常の会話は、恐ろしく複雑な媒介子の連鎖になることもあり、そこでは、感情や意見、態度が至るところで枝分かれする。」（ラトゥール 2005＝2019:74）

中間項はA（インプット）があれば、必然的にB（アウトプット）につながる、という線形的な因果論で結ばれるものである。1＋1 というインプットは 2 以外になりようがない、という意味で、「意味や力をそのまま移送する〔別のところに運ぶ〕もの」である。それが、科学的であり客観的な説明である、とされる。一方、「日常の会話」というのは、ある内容を話せば必然的に特定のリプライが来る、ということはない、という意味で線形的な因果論で収まらず、「複雑な媒介子の連鎖になる」ことも、ごく当たり前のこととされている。

ラトゥールの興味深いのは、科学においても、中間項ではなく、媒介子的な働きが大きな位置を占めている、と指摘している点である。彼は、一般的に認識されている事実を＜厳然たる事実＞（matter of fact）と規定した上で、それ以外にもうひとつ、＜議論を呼ぶ事実＞（matter of concern）という概念を提起している。

「後者にみられる非常に不確定性が高く、激しい議論を呼びつつも、実在しており、客観的で、非定型的で、何よりも関心を引くエージェンシーは、厳密には客体として捉えられず、むしろ集めるもの<gathering>として捉えられる」（ラトゥール 2005＝2019:217）

2019 年の冬、中国の武漢で発生した後、2020 年春には世界中を大恐慌に陥れた新型コロナウィルスに基づくパンデミック。これは、まさしくウィルスという実在する客観的なモノなのだが、その感染源や感染ルート、あるいは効果的なワクチンが不明であった時期においては、「非常に不確定性が高く、激しい議論を呼びつつも、実在」するものであった。本稿を書いている 2021 年も、感染爆発→緊急事態宣言の悪循環が繰り返されており、経済や社会への影響も含めて、まさに＜議論を呼ぶ事実＞（matter of concern）そのものである。それは、コロナウィルスやその対策としてのワクチンなどが、A→B、という形で因果論的に確定した「中間項」ではなく、政治やＳＮＳ上での人々の議論、あるいは実際の死者数など、「恐ろしく複雑な媒介子の連鎖になることもあり、そこでは、感情や意見、態度が至るところで枝分かれする」「媒介子」として機能しているからである。

またラトゥールは、人間と非人間を切り分けて、前者は主観的で後者は客観的である、と分け隔てる考え方に否定的である。新型コロナウィルスを例に挙げると、グローバル化した社会の中で、中国の一地方で発生したウィルスは瞬く間に全世界に広まった。これは人間と非人間が互いに媒介子として「意味や要素を変換し、翻訳し、ねじり、手

直し」するプロセスが高速度で世界的に進んでいった結果ゆえ、と言える。人間と非人間が、ともにアクターとして連関（ネットワーク）することによって、どのようなダイナミズムが動いていくのか。それを記述するのが、アクターネットワークセオリー（ANT)である、と言える。

その動的ダイナミズムに関連して、ラトゥールの主著『虚構の近代』(新評論）の注に、訳者川村久美子がラグビーをたとえとした非常に興味深い記述があった。

「プレーヤーからプレーヤーへパスされることで、ボールはゲームの流れを変え、プレーヤーの役割を変える。主体間をパスされることで、ボールは『“私”（主体）であること』を交換させる。そして、それぞれのアクタントの主観性はこの『交換手』の軌跡を通して相互に編み上げられていくのである。」(ラトゥール 1994＝2008:95)

ラグビーボールというのは、本来モノである。だがラトゥールが準拠する哲学者ミッシェル・セールは、それを「準モノ（準客体)」と名付け直す。準モノとは「主体のマーカーであり、間主観性の構築者である」ともセールはいう。ラグビーボールの例に戻るなら、ラグビーボールはラグビーというスポーツにおける象徴的なマーカーである。プレーヤーたちは、そのボールを追いかけて、間主観的なゲームを行っていく。つまり、ボールは物言わぬ客観的なモノでもあるのだが、それがパスされたり、こぼれ落ちたり、ゴールポストを越えることで、間主観的な物語は大きく変わっていく。プレーヤーはラグビーボールを追いかけているのだが、ラグビーボールというモノに翻弄されていく中で、ゲームの局面が変容する。そういう意味で、プレイヤー（人間）とラグビーボール（非人間）を明確に切り分けることは出来ない。

アクターネットワークセオリーが興味深いのは、一見すると近代社会は主観と客観の、人間と非人間の、自然と社会の、分化や純化が進んだと思われているが、実のところはハイブリッドが進んでいったのだ、と指摘している点である。ラグビーというゲームにおいても、プレーヤーとボールは切り分けることが出来ず、両者がハイブリッドに異種混交していくことで、ゲームが進行していく。ボールと一体になる、ということの重要性は、野球やサッカーなど、球技スポーツでは一般的に言われていることである。

そして、本稿で記述・分析したいのは、そのような人間と非人間の、主観と客観のハイブリッドは、死を巡る局面でも日常的に起きているのではないか、という点である。妻と筆者、を異なる主体と切り分けずに、妻と筆者が相談するなかで決められたこと、と捉えると、妻と筆者は相互連関するネットワークとして機能し始める。

4. 死者と生者のネットワーク

死者と生者を切り分けず、ネットワークとして記述した著作がある。チェコ人の人類学者、郷堀ヨゼフは、新潟県糸魚川市旧能生町でおこなったフィールドワークで、地区に住む高齢者 25 人（平均年齢 88.2 才）に「死者との関係性」に関するインタビュー調査を行い、それに基づく博士論文を書き上げ、『生者と死者を結ぶネットワーク―日本的死生観に基づく生き方に関する考察』（上越教育大学出版会）という書籍を刊行している。この著作が非常に興味深いのは、書籍タイトルにも示されているように、「生者」の人間と「死者」の非人間をネットワークでつなげるのが、「日本的死生観」である、と喝破している点である。日本を代表する民俗学者の小松和彦は、「わたしたちの世界＝人間界」(A）と「かれらの世界＝異界[3]」(B)を二つの円で描き、その二円が交錯する部分 (C)を「「境界」と名付けているが(小松 2003:14)、この概念を用いながら、郷原は (C)について、次のように提起する。

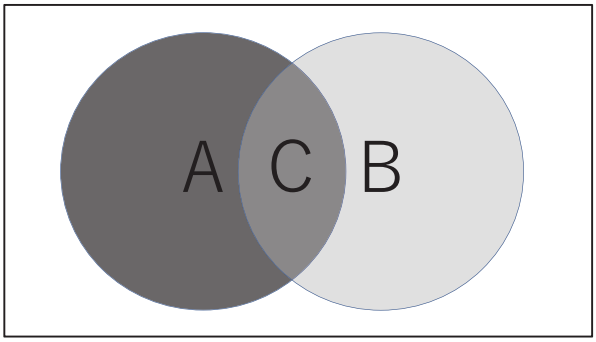

図１　異界をめぐる概念図（出典　小松 2003:14）

「この二つの世界が重なっている領域を境界と称し、そこには、墓や仏壇（外部の側面）、夢や思い出（内なる側面）などが入っていると考えられる。」（郷原 2016:53)

この郷原の指摘の興味深いのは、墓や仏壇などの「モノ」、夢や思い出などの「経験」のどちらも、生者がリアルに把握できるものなのだが、明らかにそれは「いま・ここ」には存在しない死者と触れる「モノ」であり「経験」である、と整理している点である。さらに、それをネットワーク的に広げて、以下のように指摘する。

「個々人のネットワークは人間界からはみ出し、境界の領域にまで及んでいる。そうすることによって、大切な存在として、つまりネットワークメンバーとして認識さ

れている死者も構造上ネットワークに入れる。」「時間の経過と共に、必要性に応じて個々人のネットワークは人間界の方向に移動したり、境界へと踏み込んだりしながら変容していく」(郷原 2016:54)

自分自身の社会的なネットワークの、アクチュアルなメンバーとして、いま・ここ、に存在していない死者が入っている。これはチェコ人の郷原にとって、驚くべき事だった。「ホトケサンにお参りするのは私の日課です」(郷原 2016:74)「めずらしいものを買ってきても、まずはホトケサマにあげるんです」(郷原 2016:92)という老人たちの語りを取り上げることにより、「ネットワークメンバーとして認識されている死者も構造上ネットワークに入れる」というダイナミズムを郷原は言語化することが出来た。その背後には、郷原が比較文化論の参照点にしている母国チェコの事情がある。

「チェコでは、技術と科学の発展もさることながら、四十年にわたる共産主義政権下で伝統・信仰・宗教が弾圧を受けた。それを背景に、無神論者すなわち宗教をもたない人が総人口の六割ほどを占め、高い割合をみせている。その結果、死後の世界を軽視し、死者との関係性を求めず、葬送儀礼という意味での葬儀を行わない人が増えつつある。その一方で、死に対処できる装置を失い、医療現場のみならず社会全体に死にまつわる諸現象に対する戸惑いやタブーが生じた。死者や死を語れない、ある意味で代表的な西洋の現代社会といえる。」(郷原 2016:130-131)

無神論者が増えることにより、「死後の世界を軽視し、死者との関係性を求めず、葬送儀礼という意味での葬儀を行わない人が増えつつある」「死に対処できる装置を失い、医療現場のみならず社会全体に死にまつわる諸現象に対する戸惑いやタブーが生じた」というのは「代表的な西洋の現代社会」であると言う。郷原がインタビューした高齢者とは違い、日本人の若い世代には宗教を持たない人が増えた。すると、日本も「西洋の現代社会」のように死がタブー視化されていくのだろうか。

郷原は、異界とのネットワーク構造に関して、以下の4類型を提起している。①「死者のみから形成されるネットワーク」は、身寄りの無い高齢者に代表されるように、対象者のネットワークが故人ばかりで、関与する生者は介護スタッフや入居施設の他の利用者のみ、という類型である。②「死者中心混在型ネットワーク」は、対象者には親戚や兄弟という生者のつながりもありながら、亡き夫・母など死者とのネットワークも等分にある例である。③「生者中心混在型ネットワーク」は先祖や亡き家族もいるが、配偶者や子ども、親友などの生者ネットワークの方が豊かである場合、としている。そして、④「生者世界中心型ネットワーク」は、対象者が生者のみと関わりを持ち、死者との繋がりが切れている場合を指す。

この四類型に基づくと、日本の村落社会では①や②の類型が多い一方で、チェコでは④の類型が多く、特定の宗教と関わりを持たない日本の都会でも、④の形態が増えていく、とまとめられるだろう。

では、現代の日本社会において、「死者との関係性を求め」る、とはどのようなことなのだろうか。以下は、特定の宗教に帰依している訳ではない、「宗教を持たない」ある日本人家族が、「死者との関係性」にどのように気づいて・築いていくのか、についてアクターネットワークセオリーの視点を用いながら記述することによって、現代日本の「生者と死者のネットワーク」の有り様を考察することを目的とする。

5. 生者から死者への移行

2021年3月1日午前9時28分、義父は病院で亡くなった。享年79才。その日のうちに通夜を済まし、翌3月2日の午前に葬儀が営まれ、葬儀後すぐに火葬場で火葬され、12時半には遺骨となった。義父は死体を経て骨になり、人間から非人間に変わっていった。

以下では喪主をした義父の娘である筆者の妻を主人公にしながら、生者から死者に義父が変容する中で、そのネットワークがどのように変容していくのか、を記述していくことにする。その際、先のアクターネットワークセオリーの視点に準拠し、通常の科学論文にありがちな、主観と客観、人間と非人間、自然と社会を切り分けて描くことはせず、その両者がどのようにハイブリッドに異種混交していくのか、に焦点化した記述をすることとする。

便宜的な段階として、5.1「生者の力が弱まる」、5.2「境界を意識する」、5.3「死にゆく者が生者を束ねる」、という三段階に分けて記述する。

5.1 生者の力が弱まる

義父は20年以上前に職場を早期退職し、田舎生活を満喫したいと都会生活に区切りを付け、関西の都市圏の自宅マンションを引き払い、中国地方の山間地に中古の一軒家を購入し、内縁の妻と移り住んだ。義父には長男（義兄）と長女（筆者の妻）がいたが、二人の母は妻が三歳の時に亡くなる。その後、当時思春期だった義兄は家を飛び出し、家族との連絡はほぼ途絶えた。妻も学校卒業後、実家を出

て義父とは距離をとった。だが、その後生活を共にすることになった内縁の妻と義父の子供たちの関係はそれほど悪くはなく、距離は離れていた為、正月に帰省するなどの最低限の関わりは、義兄家族も筆者家族も持ち続けていた。元気な頃の二人は、瀬戸内や日本海側に釣りに出かけたり、庭の畑で野菜を育てたり、鈴なりに育つ柚を絞って柚果汁を保存し、筆者家族に分けてくれたり、と田舎暮らしを満喫していた。

だが、そのような適度に離れた肉親関係が一変するのは、筆者夫婦に子どもが生まれてすぐの、2017 年であった。料理自慢だった内縁の妻が「食事の味がわからなくなった」とその前から聞かされ、気になっていた。内縁の妻の親族にも、筆者の妻は連絡をとっていたが、その段階では見守りレベルで、それ以上の対応がなされていなかった。2017 年 5 月に、筆者家族が「孫」の顔見せに義父の家を訪れた時、きれい好きの内縁の妻は料理も掃除も出来なくなり、初期の認知症の疑いがあったのだが、義父も内縁の妻も「私たちは大丈夫」と主張し、それ以上の対応は出来なかった。

その後、秋になり、内縁の妻の様子がおかしいと近所の民生委員からの連絡で、地域包括支援センターの保健師から妻にも電話がかかってくるようになる。当時の筆者家族は甲府に居を構えていたため、妻は義父のことが気になっても、0 才の娘を置いて（あるいは連れて）、中国山地まで行く余裕はとてもなかった。保健師にとっても、家族関係が複雑で、義父夫妻以外の肉親者はみな離れた距離に住んでいて、キーパーソンが特定しにくく、電話越しでパニックになっていた。結果的に、妻が様々な判断をするキーパーソンとなった。

そんな状態が続く中で、内縁の妻の娘と連絡が取れ、義兄とやりとりもし、結果的に義父夫妻は内縁関係を解消し、内縁の妻は娘家族のもとに引き取られることになった。その引っ越しや、二人の関係の清算が済んだ 2018 年春、筆者の職場が姫路に変わることにより、義父の家まで車で 1 時間半の距離に縮まる。そこで、金銭管理や生活支援全般の見守り役割が、それ以前に一時的に担っていた義兄夫婦から妻に移ることになった。娘を認可外保育園に通わせている間に、毎月一度以上は義父の家に妻が通うようになった。義父の要介護認定も取れて、ケアマネと訪問介護サービスが付けられ、在宅一人暮らし生活がスタートした。この時点で、妻と義父の関係性は深まっていく。

2019 年夏、義父がふらつきながら歩いて買い物に行こうとして、脱水症状になりかけているのが近所で発見され、民生委員やケアマネからも、在宅生活が限界になった、と告げられる。義父自身も、認知症の症状を徐々に示すようになっていた。様々な入所施設を妻が探すがどこも入居待ちで途方に暮れる中、筆者の仕事上の付き合いがある知人がグループホームを紹介してくれ、そこに入居することになる。その後、妻は義父の家を片付け、売却の手続きをする。

義父の生活力や判断力がしっかりしていた時代は、義兄や妻もあまり義父と内縁の妻には積極的に関わらず、没交渉的であった。だが、二人の認知能力や ADL の低下と共に、他者が支援に介在する必要性が高まる中で、義父の今後のことを巡って妻は義兄夫婦とのやりとりも豊かにするようになる。その時点で筆者夫婦は結婚後 15 年近く経っていたが、15 年の間に妻が義兄と最もやりとりをしはじめた時期にもなった。ある意味、義父の、生者としての力が弱まる中で、義父家族は少しずつ繋がりを取り戻し始めた。

5.2　境界を意識する

義父を巡る変化が急激に進行し始めるのは、2021 年 1 月 27 日、義父が腸閉塞を起こし入院した病院で、危篤状態になり、妻が呼び出された時だった。その日のメモ書きを抜粋する。

【突然、ACP＝人生会議】

先週末、今年 80 才を迎える認知症の義父が腸閉塞になり、グループホームから緊急入院。腸閉塞自体は治ったのだが、今度は酸素濃度が低下し、近い将来に気管挿管するか、の判断を、昨日の朝になって急遽、求められる。医療従事者の妻は、「電話で判断したくないので伺います」と伝えると、「PCR 検査の陰性証明が無いと院内に入れません」とのこと。それが、昨日の正午。

で、色々探して、午後からでも三宮で自費で PCR 検査の即日検査が出来るクリニックを見つけ、そこで検査を受けて、新神戸から新幹線にのって、入院中の病院まで向かう途中に陰性がわかり、なんとか面会できる。ただ、主治医には会えなかったので、昨日は現地のホテルに宿泊。僕は急遽一人ワンオペで、風邪の後遺症で咳き込んでいたので、娘と二人でてんやわんや。

その後、延命措置をめぐり医師や看護師から色々聞き、即答せず、我が家に帰宅。今晩は身内と急遽、延命治療をめぐる電話会議。僕は偶然、とある SNS で紹介されていた、終末期医療に関わる中村仁一さんの『大往生したけりゃ医療とかかわるな　「自然死」のすすめ』を買い求めたところだったので、ザッと眺める。

電話での親族会議の後、義父が以前から話していた内容

に添いつつ、この本に書かれていた論点を参考に、現時点で以下のような方針を妻と確認する。

【義父の治療をめぐる現時点の方針：医療死より自然死を重視する】
・心臓マッサージと昇圧剤は使っても良い
・経口摂取が不能なので、末梢静脈輸液を現在している。ただ、今後、経管栄養はしない。中心静脈栄養はしない。
・人工呼吸器をつけるかどうかで迷っている。痰を引くのは大切なので、誤嚥性肺炎の治療のためには必要だと考えている。だが、今の義父にそれをして、肺炎が治ったところで、それ以外のところで、人工呼吸器が必要になったときに、義父はそれを望んでいない。
・おしっこの管も、鼻の管もずっと入れているのは大変。義父は「そっとしておいてくれ」「抜いておいてくれ」と思っているはずだ

正直、この延命治療には「正解」がない。というわけで、上記の内容も、2021年1月28日時点の、我が家のミクロな一時決定。時々に応じて、その都度、アップデートしていくしかないと思っている。その後、アドバンス・ケア・プランニング（Advance Care Planning：ACP）(4)のことを思い出す。なるほど、こういうことを事前に考えておくのは、確かにいま・ここ、の「いざというとき」のために、本当に大切だと思う。明日、自分の親にも勧めてみよう。

――――――――――

この義父の危篤によって、妻と筆者は、リアルな義父の「死の可能性」を認識する。延命治療に関する方針を夫婦で決定していくプロセスは、義父の生者として生きる期間をどのように過ごしたら良いのか、を、意思表明がしにくい義父に変わって、義兄や筆者とも相談しながら、妻が決めていくプロセスであった。義父の生者としての力が弱まるだけでなく、死者との境界が一気に意識されたエピソードであった。

5.3　死にゆく者が生者を束ねゆく

義父は1月末の危篤状態からはいったん回復した。その後、急性期病棟の対象ではないと判断され、関連病院の療養型病床に2月下旬に転院する。この病棟は、死を看取るまでの患者さんが多く入院している病棟で、看護師もベテランスタッフが多い。コロナ危機で転院には立ち会えず、Zoomや電話で治療方針の相談を妻が医療スタッフと行った際も、「延命治療はしない、人工呼吸器は使わない」、という方針を尊重してくれた。それだけでなく、「明け方に息を引き取る人が多くて、その前日に予兆がある場合、連絡します」、と言われる。転院して数日後の2月28日（日）の午後、妻の携帯に病院から連絡が入り、「そろそろかも」と教わる。

妻はすぐに準備して、病棟に駆けつける。大部屋からトイレや洗面台もある個室に義父は部屋を変え、簡易ベッドも設置され、妻は義父と一晩を過ごしながら、あれこれ義父に話しかけることができた。妻も医療従事者ゆえに、看護スタッフと相談して、その時点で医療上の必要もなくなっていた鼻の挿管も夜には抜いてもらう。その段階で、妻にはかすかに義父から死臭もしていたという。そして翌朝の2021年3月1日午前9時28分、すーっと息を引き取った。死亡に立ち会った医師から、「こんなに綺麗な状態でお亡くなりになる人は珍しい」と言われるほど、気管切開も胃瘻もなく、自然な形で亡くなった。一睡もせずに義父の側にいた妻が、ふと明け方4時頃、窓から外を眺めると、白鷺が一羽、夜明け前の屋上にたたずんでいた。その鷺は、朝8時頃いなくなっていた。

1月末の義父の危篤の際、グループホーム入居時にお世話になった筆者の知人に妻は連絡を取り、紹介された葬祭業者にも「もしもの時」の相談が一応出来ていた。そのため、死去後すぐに遺体の引き取りや通夜・葬儀・斎場の手はずも済ますこと出来、その日の夜には通夜を行い、翌日には葬儀と火葬を済ます。臨終の際に看取りに立ち会った妻は一睡もしていなかった為、葬儀の手はずを整え通夜が終わった後、一度姫路の自宅に戻る。その代わり、義兄夫婦や義兄の息子家族が仕事を切り上げて通夜前に葬儀会場を訪れ、通夜の後も一晩葬儀会場で亡くなった義父に付き添う「棺守り」の役割を果たすことになる。妻は冬用の喪服を準備していなかったため、義兄の妻から黒の衣装を借り、またこれまで義父に一番付き添ってきたからということで、義兄に変わって喪主を務めることになる。

筆者と娘は3月1日の通夜には参列せず、妻と共に3月2日の葬儀と火葬に立ち会うことになる。朝早く姫路から1時間半かけて会場にかけつけ、9時45分から葬儀と告別式、初七日法要まで行う。友引が翌日であるため、葬儀会場が混んでいると言われ、11時半から斎場での火葬の予約しか取れなかったゆえ、逆算しての葬儀・告別式となる。義父は親戚づきあいも殆どしていなかった為、義兄家族と妻（筆者）家族のみの家族葬を行う（お通夜にはグループホームのスタッフとグループホームを紹介してくれた筆者の知人が弔問に訪れてくれた）。納棺時には、義父が好きだったお酒やタバコを入れ、靴が汚れていたからと妻は義父の靴を磨いていれる。ライターを納棺するのは火葬では禁じられているので、妻は葬儀場に向かう車の中で、

マッチの購入と、ついでに義父が好きだった新聞を購入するよう、義兄家族に電話でお願いする。納棺後すぐに出棺。斎場まで車ですぐの場所だったので、到着後すぐに火葬が始まる。火葬が終わるまでの１時間は、斎場の控え室で待つことに。

義父の人間としての意志が弱まるプロセスは、その周りの人々のつながりやネットワークが強化されていくプロセスでもあった。それは、義父が生命を全うし、人間としての役目を終え、死体になり、火葬されて骨に変わっていっても、終わってはいない。火葬される間の待合室で、四十九日の法要が 4 月 18 日の日曜日に営まれることが義兄家族と話し合って決まる。筆者の 4 歳の娘はその日、義兄の 6 歳の孫娘（＝従姪：いとこめい）と仲良くなり、1 ヶ月半後の法要時に再会するのを楽しみにしている。それまでほとんど繋がっていなかった娘と従姪が、友人として結ばれたのも、期せずして火葬場会場の待合室での、義父が火葬されている（＝つまり人間から非人間に変わる）間の 1 時間の待ち時間だった。ここでも、その場に存在していない義父が、周囲の人々のネットワークをつなげる媒介項として「存在」していた。

6　人間と非人間の融合

6.1　中間項から媒介子へ

義父が元気だった時代から、認知症になり、在宅一人暮らしを経てグループホームに住まいを変え、入院し病院で亡くなって、故人となる。この一連のプロセスは、義父にとってみれば、人間から非人間へ、と移行するプロセスであった。だが、義父の二人の子ども（義兄と妻）の視点から捉え直すと、支援が必要な義父の存在は、義父を巡るネットワークの中に妻や義兄が濃厚に組み込まれていくプロセスでもあり、義父が死亡＝非人間になったあとも、その連関（ネットワーク）は途絶えることなく、強化されていくプロセスでもあった。

これは、見方を変えると、義父の存在が＜厳然たる事実＞（matter of fact)から＜議論を呼ぶ事実＞（matter of concern)へと移行していくプロセスであった、とも言える。義父は早期退職して田舎暮らしを楽しんでいる時代までは、義父の生き方や意思決定はあくまで本人と内縁の妻の二人で決めており、義父の二人の子どもが口を挟むことはない、＜厳然たる事実＞（matter of fact)であった。だが、義父の認知症状が進み、地域包括支援センターやケアマネジャー、ホームヘルパーなどに日常生活の支援をしてもらい、妻が金銭管理や見守りに訪問するようになると、父の生活をどうしていくのか、は義父と支援者、筆者の妻などが話し合って決めていく局面が増えていく。朝から毎日ビールに焼酎としっかり飲んでいた義父の飲酒量をどうするか、近い将来在宅生活が出来なくなった時の終の棲家はどこなのか、その際の持ち家の処分はどうするか、年金や預貯金だけで今後の義父の生活はやりくり可能なのか･･･といった＜議論を呼ぶ事実＞（matter of concern)が次から次へと現れてきて、妻は支援者や義父などと何度もなんども電話や対面で話し合い続けていった。

義父とその子である妻が「媒介子」として出会うことにより、お互いが「自ら運ぶとされる意味や要素を変換し、翻訳し、ねじり、手直しする」ということも見られた。例えば義父に在宅生活が出来なくなり、ショートステイを経てグループホームに移り住むことになった日、筆者家族が義父を車で送迎することになった。その際、義父はショートステイでお酒が飲めなかったので、「ちょっとだけスーパーに寄ってほしい」と運転する筆者に何度も懇願する。だが妻は「孫がじっとしてられないから、おじいちゃん我慢して」とその願いをかわして、グループホームに送り届けた。以前なら自分の思い通りにしようとしていた義父も、諦めてそれに従う。ここで、父と子、という役割や関係性に大きな変化が生じ、義父と妻という二つの媒介子の「自ら運ぶとされる意味や要素を変換し、翻訳し、ねじり、手直しする」様を垣間見る事が出来た。

6.2　リアリティとアクチュアリティ

ラトゥールは因果論的なアプローチと ANT のアプローチの違いを、次のように指摘している。

> 「ドゥルーズの用語では、第一の解法は『可能なものの実在化（realized potentials）』であり、第二の解法は『潜在的なものの現実化（actualized virtualities）』である。」（ラトゥール 2005＝2019:113）

前者の場合、既に可能性があるもの（potential）が実際に起こる（realize）ことであるが、後者の場合は、潜在的に仮想されること（virtuality）が現実化する（actualize）ことである。これに関連して、精神医学者の木村敏はリアリティとアクチュアリティの違いを次のように述べている。

> 「『リアリティ』は･･･事物的・対象的な現実、私たちが勝手につくり出したり操作したりすることのできない既成の現実を指す場合に用いられる」「『アクチュアリティ』のほうは･･･現在ただいまの時点で途絶えることなく進行している活動中の現実、対象的な認識によって捉えることができず、それに関与している人が自分自身の

アクティヴな行動によって対処する以外ないような現実を指している。」（木村 1994:29）

木村は両者の例として、「誕生と死によって区切られた不連続な生命」が「リアリティ」であり、「親から子へ、子から孫へと世代を通じて引き継がれる」「『生命のリレー』のバトン」という「連続的な生命を生きている」という「現実性は、アクチュアリティという以外に言いようがない」（木村 1994:30）と述べている。

このリアリティとアクチュアリティの違いは、本論考に大きな意味をもたらす。筆者が妻と結婚した頃の義父は、「事物的・対象的な現実」であり、あくまでも「リアリティ」の範疇にいた。だが、＜厳然たる事実＞が＜議論を呼ぶ事実＞に移行する中で、「リアリティ」は「現在ただいまの時点で途絶えることなく進行している活動中の現実」である「アクチュアリティ」に移行し始める。医療従事者でもある妻にとって、一般的な死に行く人への医療的ケアに関しては、医療行為としての「可能なものの実在化（realized potentials）」の側面が大きかった。だが、2021 年 1 月 27 の夜、義父が危篤で今後の判断を迫られた際、「事物的・対象的な現実」であり、あくまでも「リアリティ」だと思っていた実の父が、近い将来死ぬ、という「潜在的なものの現実化（actualized virtualities）」＝アクチュアリティとして一気に迫ってきたのである。それは、意思決定が出来ない状態であった義父「に関与している人」である妻が「自分自身のアクティヴな行動によって対処する以外ないような現実」に直面させられた、ということでもあった。

実は本論考の草稿を読んでコメントをくださった方の何人かが、義父が死にゆくプロセスをどう思っていたかがわからない、というコメントをくださった。それは、妻にも筆者にもわからなかった。認知症になる以前、あるいは危篤になる以前はそんな話はしていなかったし、危篤になった後は、確かめようもなかったからである。アドバンス・ケア・プランニング（Advance Care Planning：ACP）も本来なら本人を交えて決めるべきことだった、が、それも出来ないままに、危篤の場面にさしかかった。

そのような意思決定における課題について、重度障害で言語的コミュニケーションが出来ない子を持つ母であり、「尊厳死」等の生命倫理関連での著作を続ける児玉真美は、次のように述べている。

「『意思決定支援』とは実は、何らかの大きな意思決定が必要になった『（時）点』でどのような手続きを踏んでその意思決定を『支援』するか、という問題ではないのではないか、と思えてきた。それはきっと、そういう『（時）点』よりも手前の日常生活という、いわば『線』のところで本人がいかに主体として尊重されているか、という問題なのだ。」（児玉 2019：251）

危篤のような「何らかの大きな意思決定が必要になった『（時）点』」だけの問題ではない。そうではなくて、「そういう『（時）点』よりも手前の日常生活という、いわば『線』のところで本人がいかに主体として尊重されているか、という問題」として捉え直すと、妻と義父の関係性も違って見えてくる。筆者家族が姫路に引っ越し、妻が月に 1 度程度、義父宅に通うようになった 2018 年以後、妻は「本人がいかに主体として尊重されているか」を、関わりながら考え続けてきた。時には通うのに不平を言い、しんどいと感じながらも、半ば義務的ではあっても、認知症を深めつつある本人の主体性の尊重をし続けてきた。義父が亡くなった後、「もう私は充分にやったから、悔いは全くない」と妻は筆者に何度も呟いていた。義父の死という『（時）点』や直前だけでなく、それ以前から、死にゆく人への主体性の尊重というか、日々の意思決定における本人の尊重（お酒が飲みたいという本人の望みを叶えるために、在宅一人暮らしでおむつがべちょべちょでも、お酒やたばこのストックを切らせなかったこと）をし続けてきた。そんな「線」の積み重ねがあったからこそ、死という時点での「悔いは全くない」につながったのであろう。

そして、義父の要介護度や医療的ニーズが高まり、＜議論を呼ぶ事実＞（matter of concern）の割合が増えていくプロセスは、媒介子同士のつながりが増えていくだけではなく、異界や境界を巡る認識が更新されていくプロセスでもあった。

6.3　死にゆく者と生者をつなぐ境界

義父が入院後、一時危篤状態になった際、妻は義兄や筆者と話し合いながら、「医療死より自然死を重視する」延命治療の方針を決める。これは、濃厚な医療を提供することにより延命可能性が伸びる、ということを拒否することであり、裏を返すと寿命が来れば一気に生者から死者に変わる可能性がある、ということを了承し、選び取るプロセスでもあった。郷原は、「時間の経過と共に、必要性に応じて個々人のネットワークは人間界の方向に移動したり、境界へと踏み込んだりしながら変容していく」（郷原 2016:54）と述べているが、義父をめぐるアクターネットワークにおいては、この危篤状態以後の 1 ヶ月の中で、一気に「境界へと踏み込んだりしながら変容していく」プロセスでもあった。

郷原は、「この二つの世界が重なっている領域を境界と称し、そこには、墓や仏壇（外部の側面）、夢や思い出（内なる側面）などが入っていると考えられる」（郷原 2016:53）とも述べているが、義父が「境界へと踏み込む」局面において、「墓」を巡る話も、＜厳然たる事実＞から＜議論を呼ぶ事実＞へと変容し始める。義父は元々九州出身だったが、就職で関西に出てきた後、最初の妻が亡くなったころに、当時住んでいた地区の共同墓地に墓を建て、そこに九州に埋葬されていた一族の遺骨や亡くなった妻の遺骨を納骨した。そこで、義父の一度目の危篤の後、2021 年 2 月に筆者の妻が共同墓地を管理する寺に連絡を取ると、「この地区を離れた義父家は、そもそも共同墓地を使う権限はない。これまで大目に見てきたが、これを機に出ていってほしい。亡くなった後の法要などもこちらではできない」と言われる。

それまで、義父が亡くなってもお墓は既にあるから、と＜厳然たる事実＞だと思い込んでいた義兄も妻も、＜議論を呼ぶ事実＞へと変化した事に当惑し、慌てて墓地探しが始まった。運良くすぐに義兄の家の近所に空いている墓地の区画が見つかり、交渉を始めることになる。また、四十九日の法要なども新たにどこに依頼するのか、をめぐって不確実性が高まったのだが、とりあえず、通夜と葬儀で法要を執り行った住職が、「今後も何かあればご連絡ください」と言っていたのを思い出し、義兄が連絡したところ、四十九日の法要もその寺で行えることになった。その後、新しいお墓のある自治体のお寺の住職と義姉が知り合いであり、宗派は異なったがそのお寺が面倒を見てくれることになり、納骨後の読経や百箇日法要、初盆など以後の供養も引き受けてもらえることになった。義父が異界にネットワークの軸足を移すことにより、これまで関係していた墓（＝境界）も変容し、新たな墓や寺とのネットワークが出来る、という形で変容が始まった。

郷原は、「無神論者」の多いチェコでは「死後の世界を軽視し、死者との関係性を求めず、葬送儀礼という意味での葬儀を行わない人が増えつつある」と指摘した。妻も義兄も、特定の宗教に帰依していなかった。そういう意味では、無神論者とは言わないまでも、「宗教をもたない人」であったと言える。だが、義父が生者から死者に移行するプロセスにおいて、「死後の世界」を急に意識し始め、「死者との関係性」を保つため葬儀や墓、法要などの準備に奔走し、「葬送儀礼」をつつがなく送ろうとする。

妻も義兄も義父も、郷原がフィールドワークを行った村落共同体が古く残る地域に住んでいた訳でもなければ、義父をめぐるネットワークには親類縁者の濃厚な付き合いもなかった。郷原は「日本の村落社会に培われてきた生者と死者のつながりは、再考すべく現代社会へと還元させるべきである」（郷原 2016:135）と述べているが、まさにここで取り上げた義父の事例は、現代日本社会において、元々境界や異界との接点の少なかった④「生者世界中心型ネットワーク」が、義父の死により、③「生者中心混在型ネットワーク」へと変容した例である、とも言える。

6.4　様々なアクターの混淆

義父が生者から死者へ、人間から非人間へと変容するプロセスは、義父自身のネットワークを変えていくだけでなく、妻や義兄という生者のネットワークを豊かにつなげ直すプロセスでもあった。それは、冒頭のラグビーの例に戻るなら、ゲームの局面が変わっていった、と言うことができるだろう。

義父が元気な間は、義父は自分でボールを持って、自分の人生というゲームをプレイしていた。だが、自分自身でプレーできる範囲が狭まることによって、義父も主体から準―主体、準―客体、客体へと変容していく。すると、義父をめぐるゲームにおいて、養育期間終了後には重要なプレーヤーから外れていた妻や義兄が再びプレーヤーとして戻ってくる。義父の認知症、在宅一人暮らし、脱水症でショートステイ、グループホームに入居、誤嚥性肺炎で入院、危篤、そして死亡・・・と、義父の状態が変わるなかで、義父が自分の人生を主体的に抱えて走れる状態ではなくなってきた。その中で、いつしか義父の人生を誰かが抱えざるを得なくなる。義父は、ボールを抱えて走る人から、自分の人生を抱えてもらう側へ、つまりボールを持って走る側から、抱えられて走ってもらうボールの側に、位置づけを変えつつあった。プレーヤー（人間）からボール（非人間）へ、と徐々に移行していくプロセスにあった。

だがラグビーボールは、「ゲームの流れを変え、プレーヤーの役割を変え」ていく「主体的」な部分も持つ。最初義兄が主に担当していた支援を妻が引き継ぐなど、「主体間をパスされることで、ボールは『“私”（主体）であること』を交換させる」。さらに言えば、義父が死にゆくプロセスのなかで、義兄と妻のパスの頻度は深まっていき、それは義父の死去後も葬式や四十九日法要などの葬送儀礼を通じてゲームは続いていくのである。それはある意味、義父が生者の世界から死者の世界へと近づいていくことで、死にゆく変容プロセスのなかで、生者の結束を豊かに結びつけていくプロセスであった、とも言える。

本稿を閉じる前に、考察したい内容が二つある。それは、①死体や遺骨はラグビーボールと同じような「モノ」か？という問いであり、②この論考における妻の位置づけは「調査対象者」ではないか？という問いである。両方とも、

草稿にコメントをくださった「第一読者」から問われた内容である。

まず、死体や遺骨は、ラグビーボールとは違う意味性を帯びた「モノ」だと筆者は捉えている。だが、両者とも、自分から働きかけることはないが、他者が強く働きかけ、その存在によって他者がめまぐるしく動いていく、という意味で、「中間項」ではなく「媒介子」の役割を果たしている「モノ」である、と言える。今回、この論考を書き上げる事ができたのも、生者としてのエネルギーが衰え、死者へと移行するプロセスを義父が遂げるなかで、妻や他のプレーヤーがどのように義父に働きかけ、義父に動かされてきたか、という視点であれば、一連のエピソードを描くことが可能である、と筆者は直観で感じたからであった。冒頭の小林秀雄に戻るなら、この論考を書く悟性（論理的思考）は、「精神が精神に向かう直観と呼ばれる注意力」に助けられて、やっと書き上げる事が可能になった。

次に、語り手問題である。これまで、妻から聞いた内容をたくさん取り上げてきたが、妻の語りそのものはほとんど取り上げてこなかった。ある「第一読者」からは、筆者が妻のことを客観的に書いているだけでは？とも指摘された。その点について、上記のコメントをもらった後、ちょうど義父の初盆の折、改めて妻に聞いてみると、こんな答えが返ってきた。

> 「父のことを回顧するのは、面倒くさくて、全部のことを言えなくて、言葉を選んで言葉で伝えるのはすごく大変で、そのうちにしんどすぎて腹が立ってくる。家族の話や幼少期の話をするのは、慣れていない。当たり前のように家族の中で話していた、という経験がない。なので、あのとき〇〇だった、と家族に伝えてこなかった。だから、父のことを振りかえる作業は、すごく面倒くさい。当たり前じゃないから。」

この妻の語りを聞きながら、「苦しいこと」と「苦しみ」の違いを思い出していた。

> 「『苦しみ』を率直に表現しにくい状況に置かれた者は、『苦しいこと』を察してもらえる表現を模索する際、時として暴力や死といった極端な方向へと傾斜してしまうことがある。」（荒井 2020:42）

障害者文学を専門にする荒井裕樹は、「苦しみ」とは、その内実を本人がある程度把握していて、それを他者に伝えたいという表現の希求であると整理し、他方で本人にもその「苦しみ」の内容が把握しきれず、詳細に表現することもできないけど、とにかく他者にわかってほしいと希求するとき、それを「苦しいこと」として他者に察してもらうしかない状況と整理する。初盆にこの妻の語りを聞いて、様々なことが氷解した。それまで、義父のことや幼少期の事を尋ねると、突然イライラしたり、怒り出したりする場面に何度も立ち会ってきた。だからこそ、今回も敢えて妻に実父の死についてインタビューする、ということはせずに、それとなく彼女が言ってくれたことや折々に話し合ってきた内容を筆者がつなぎ合わせて、このような論考を書き上げた。そして、それについて彼女から意見やコメントをもらい、対外的に公表して良いか、も判断してもらった。

三歳で実の母を亡くし、その後、複雑な家庭環境で育ち、一刻も早く家から出たい一心で自立した妻にとって、父は大切だけれど好きではないという、相反する複雑な感情を持つ相手であった。そんな妻にとって、父や原家族のことは、ずっとモヤモヤした対象であり、どう表現してよいのか、もわからず、父のことを話している最中に（話し相手の筆者からすれば理不尽にも思える）怒りを爆発することによって、「苦しいこと」を表現しようとしていた。

そして、妻が義父を見送るプロセスに一区切りを付け、「もう私は充分にやったから、悔いは全くない」と思えた段階で、彼女の中でやっと「苦しいこと」（の一部）が「苦しみ」へと変わってきたのかも、しれない。であれば、今から妻にインタビューをして、「妻の語りに語らせる論文」に仕上げるべきなのか。筆者の直観はそう判断しなかった。初盆を終えた段階で、既に言語化されていることだけを形にすることで、妻と筆者が遭遇した「境界領域的なコミュニケーション様式」を間主観的に、だけでなく「様々な人とモノが連関していく一つの過程」を浮かび上がらせることができるのではないか。それによって、結果的に彼女の「苦しいこと」の一部も本稿全体で表現出来るのではないか、と考えたのである。

それが成功しているかどうか、は、読み手のあなたの判断に委ねたい。

【附記】妻や義兄から、本論文の公表の承諾を得ている。

謝辞：この原稿は、多声的であることを目指したので、草稿を書いた後に、たくさんの仲間に読んでもらった。その上で、草稿に示された違和感の一部は、本文の中に入れ込んでいる。筆者自身の文章への批判的コメントは、筆者の至らなさや「影」と直面するようでしんどかったが、それを取り込むことで、書き手と読み手のハイブリッド的な、モノローグな論考を超える何かが出来れば、と願っている。もちろん、本文全体の文責は筆者にある。コメントを寄せてくださった「第一読者」の方々（伊藤嘉高さん、深尾葉子さん、鈴木鉄忠さん、高橋真央さん、伊藤文人さん、二木泉さん、増渕あさ子さん、中野加奈子さん、向山夏奈さん、宮本泰輔さん）に、記して感謝申し上げます。

＊本研究は科研費 20K02239 の助成を受けたものです。

【注】

（1）この小林秀雄の視点については、奥野（2020）の著作で知り、多くのヒントを得た。

（2）ラトゥールは「人間以外のもの」である「非人間」について、「非人間はアクターでなければならず、象徴的投影のあわれな運搬役であってはならない」（ラトゥール 2005＝2019:25）、と規定している。「非人間」＝「モノや抽象的な概念」である伝説の剣や王国は、一般的には客体とされ、人間が「象徴的投影」を行う対象であると認識されている。だが、これらの「非人間」を「媒介子」と扱うことによって、「非人間にははっきりとした役割が与えられている」（ラトゥール 2005＝2019:24）。本稿では伝説の剣や王国だけでなく、「お墓」「死者」などの「非人間」も「媒介子」であり、「はっきりとした役割が与えられている」とする ANT の視点から事象を分析している。

（3）この小松（2003）の「異界」概念に関して、査読者からは谷川（1989）や折口（1996）が述べる「他界」概念の方が「この世とあの世の関係や近接性」を論じるものとしてふさわしいのではないか、との指摘を受けた。ただ本稿では、上記の先行研究を検討した上で、あえて「異界」という概念を採用する。

小松（2003）の「異界」概念には、「慣れ親しんでいる既知の領域と未知の領域に分割する」（小松 2003：11）ことが想定されており、さらに彼は「人間は、個人のレベルであれ、集団のレベルであれ、その内部と外部の双方に制御し得ない『闇＝異界』を抱え込んでいた」（小松 2003:12）と述べている。

確かに谷川（1989）や折口（1996）も述べるように、日本の伝統的な宗教観に基づくと、「この世とあの世の関係の近接性」としての「他界」概念を用いることにも一理がある。だが、本稿に登場する妻や筆者は伝統社会から切り離されており、それまで死者やあの世の世界は、「慣れ親しんでいる既知の領域」との近接性や関連性を感じられない、「未知の領域」であった。しかも、義父が死にゆくプロセスにおいて、「制御し得ない『闇＝異界』」が顕在化していった。

上記の理由から、本稿においては、あえて「他界」という表現ではなく「異界」という表現を用いる。

（4）ACP や終末期医療については、義父の危篤の時期に会田（2019）を読み、多くの学びを得た。

【文献】

会田薫子『長寿時代の医療・ケア―エンドオブライフの論理と倫理』ちくま新書（2019）

荒井裕樹『車椅子の横に立つ人』青土社（2020）

郷堀ヨゼフ『生者と死者を結ぶネットワーク―日本的死生観に基づく生き方に関する考察』上越教育大学出版会（2016）

伊藤嘉高「アクターネットワーク理論と人間科学：媒介子としての身体を記述する」『社会学年誌』62 巻 2021. pp7-22

木村敏『心の病理を考える』岩波新書(1994).

小林秀雄『小林秀雄全作品〈別巻 1〉感想(上)』新潮社(2005)

児玉真美『殺す親、殺させられる親―重い障害のある人の親の立場で考える尊厳死・意思決定・地域移行』生活書院（2019）

小松和彦『異界と日本人―絵物語の想像力』角川選書(2003)

Latour, Bruno, *Nous n'avons jamais été modernes - essai d'anthropologie symétrique,* La Découverte, 1994. (= 川村久美子訳『虚構の「近代」―科学人類学は警告する』新評論(2008))

Latour, Bruno, *Reassembling the Social: An Introduction to Actor-network-theory,* Oxford University Press, 2005.(= 伊藤嘉高訳『社会的なものを組み直す: アクターネットワーク理論入門』法政大学出版会(2019))

中村仁一『大往生したけりゃ医療とかかわるな―「自然死」のすすめ』幻冬舎新書（2012）

奥野克巳『モノも石も死者も生きている―世界の民から人類学者が教わったこと』亜紀書房(2020)

折口信夫『折口信夫全集 20』中央公論社（1996）

谷川健一『常世論―日本人の魂のゆくえ』講談社学術文庫（1989）

Rabinow, Paul, *Reflections on Fieldwork in Morocco,* University of California Press, 1977.(=井上順考訳『異文化の理解』岩波書店(1980))

（令和 3 年11月25日受付）